

ああ、泥のように眠れる幸せ。眠りにつく前が一番幸せな時間だったのは、あれが最後であった。

(佐藤 慈子)

「ワジ」は苛酷だった

今回の遠征で自分自身の中で強烈に印象に残っているのは「ワジ」です。初めてワジという言葉聞いた人は何のことかわからないと思いますが、川が涸れている部分のことを指して、こう呼びます。もちろんその箇所はカヌーで進むことができないので、徒歩で進まなければいけません。その距離135km。日本では300kmを踏破する合宿を経験していたので、それほど苦にならないだろうとたかをくくっていました。しかし、やはり砂漠は苛酷です。日中の気温は40度以上になり体力の消耗は想像以上でした。その上周囲の景色があまり変化しないのと、地図を広げてみても、自分たちがいったい現在どこをあるいているのかということがはっきりしないので、精神的に極めてつらい4日間を過ごしました。

しかしこのような苦勞の反面、遠征の全行程の中で出会った人々と、交流している時には、疲れを忘れてしまいました。我々の持っているものの全てをめずらしいように澄んだ目で眺め、色々とウイグル語で話しかけてきます。もちろん言葉そのものは理解することができないのですが、お互いの身振りが十分に補ってくれました。このような辛い経験や地元の人々との親密な交流など、自分自身には、もう2度とないことでしょう。今回の経験は極めて貴重で幸運でした。

(山本 靖朗)

注) 以上の文は、91年11月29日関西大学広報課発行『関西大学通信 204号』に掲載されたものです。